

イザヤのアハズ王に対する問いは、「戦いを始めるにあたって、指揮者たる者は神さまに勝利のしるしを何に求めるか」でした(10~11 節)。それは、「深く陰府の方に」、つまり、アッシリアの援助を勝利の約束と見るのか、あるいは「高く天の方に」、つまり、神さまの約束を信じて、援助を求めずに自力で危機に対処するか、でした。アハズ王の答えは、「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」でした。アッシリアに救いを求めたいアハズ王は、神さまに対する敬虔さを装いつつも婉曲にイザヤの忠告を断ったのです。

このアハズ王の態度を、イザヤは人間をも神さまをも優柔不断の態度であるとして、神さまから与えられるしるしを示すのです。それが 14 節のインマヌエル預言です。新共同訳が「おとめ」と訳している語はギリシア語訳七十人訳、ラテン語訳ウルガータ以来、「おとめ」の意味に取られ、マタ 1:22~23 のイエスの処女降誕の預言と解釈されて来ました。しかし、最近では旧約聖書の他の用例を参考にして、「おとめ」は、「既婚の若い女性」と解釈されることの方が多いのです。アハズ王が神さまに従わないのなら、それに代わる王が生まれ、その名は「インマヌエル(神はわれらと共にいます)」と名付けられる、というのです。

神さまの救いの約束を、預言者や祭司が語る場合、普通は「神はあなた(がた)と共に」と語られますが、ここでは「神はわれらと共に」と言われています。それは、神さまの約束に信頼して、これから来る危機の時を少数者として生き抜こうとするイザヤとその弟子たちと共に神さまはいるということを意味していると思われまます。インマヌエルの誕生は、神さまに信頼しないアハズ王にとっては滅びであり、神さまに信頼する者にとっては救いなのです。

マタイによる福音書では、まだヨセフと関係していないマリアから生まれたイエスはイザヤが預言した「インマヌエル」、「神が我々と共におられる」という現実をもたらす方であることが強調されています。そして、福音書最後の部分では、復活させられたイエスが「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と話したと記されています。復活させられてイエスが自分たちと共にいて、自分たちの中に働いているというのが、最初期の弟子たちの共通の信仰の内容でした。彼らにとって、復活させられたイエスが共にいるとは、「神が我々と共におられる」ことに他ならなかったのです。これは旧約聖書の預言ではなく、初代教会の信仰告白なのです。すなわちイエスは、神さまが私たちと絶えずともにいるという、神さまの約束とイスラエルの人たちの切望を叶えているのです。